

研究部通信



第 4 号

平成 29 年

5月29日

「理論研修会を振り返って」



授業研を目指して頑張りましょう！



5月26日に本校での理論研を行いました。先生方、お疲れ様でした。

子ども達がこれからの時代を生き抜いていくために「育成すべき資質・能力」として、①「何を理解しているか、何ができるか（生きて働く『知識・技能』の習得）」、②「理解していること・できることをどう使うか（未知の状況にも対応できる『思考力・判断力・表現力等』の育成）」、③「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか（学びを人生や社会に生かそうとする『学びに向かう力・人間性等』の涵養）の3つの柱が示されていることを教えていただきました。3つの柱をバランス良く指導に取り入れていくことが、「生きる力」の育成に繋がっていくこととなります。

新しい学習指導要領には、この3つの柱に対応する形で各教科の目標が示されています。

【例】小学部国語 1 目標

言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、国語で理解し表現する資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

- (1) 日常生活に必要な国語について、その特質を理解し使うことができるようにする。（「知識・理解」）
- (2) 日常生活における人との関わりの中で伝え合う力を身に付け、思考力や想像力を養う。（思考力・判断力・表現力等）
- (3) 言葉で伝え合うよさを感じるとともに、言語感覚を養い、国語を大切にその能力の向上を図る態度を養う。（学びに向かう力・人間性等）

※ゴシック・下線部分は田中が加筆

1つの単位の中で、ある時間は「知識・理解」をねらい、別の時間は「思考力・判断力・表現力等」をねらう等のように、ぶつ切りにして取り扱うものではなく、あくまでも単元全体を通して3つの柱を自然な形で関連させ合いながら位置づけていくことが大切だと思います。

また、竹林地先生から、これまで知的障がい教育においても、観点別評価の視点がなかった訳ではないというお話がありました。今後、本校の児童生徒の「生きる力」を育てていくために授業づくりを進めていく上で、この3つの柱も参考にしつつ、単元を通して、観点に沿った目標設定や学習評価を取り入れていくことも重要な視点になってきます。

さらには、「資質・能力」を育むため「どのように学ぶか」という点では、「主体的・対話的で深い学び」についてお話がありました。本校の研究では、この部分については主に平成30・31年度にかけて取り上げ、先生方と一緒に創り上げていきたいと考えていますが、少しずつこのような授業づくりも意識しながら実践を重ねていきましょう。

教師が主語ではなく、『子どもの思考や内面の繋がり』を主語にして『学びの文脈』を考えていくと、単元の中身や年間の配当、さらには、教師が授業で最初に発する発問や使用する教材等も変わってくると思います。『教えない授業』とは、子どもが分かって自ら動いたり、能動的に探求したりしながら「なりたい自分」に向かって努力する授業であるのだろうと改めて感じさせていただきました。